

## コンスタンティヌス帝の保護神格再考：Apollo、Sol、それとも Grannus？

豊田浩志

## 口頭発表冒頭前置き

最初に、今回の発表の時代背景と、私の結論についてあらかじめ簡単に述べておきます。コンスタンティヌスは、彼の最初の統治時代においては、保護神格として、統治領域内、すなわちガリア・ゲルマニアを中心とする地域では、ケルト・ゲルマン系神格を採用し、帝国政治神学レベルでは、それをギリシア・ローマ系神格に重ねて表明するという、ダブルスタンダードで対応していた。それというのも、コンスタンティヌスの支配は当初、帝国東部の正統統治者だった正帝ガレリウスの主導下で発足したばかりの第 2 次テトラルキア体制の中で、決して万全の正統性を主張できない、認知度の弱い立場だったので（実際、最初は篡奪帝だった）、その後の歴史が証明するような諸皇帝乱立の熾烈な生存競争の中で生き残るために、まず第 1 に自己政権の足固め、具体的には支配領域内での軍事権の掌握、支配下の民心の掌握に腐心せざるをえなかった、という事情があったからである。

彼は、父親コンスタンティウスが 10 年にわたり手塩にかけて育ててきたガリア・ゲルマニア方面軍を父の死後引き継いだわけであるが、その軍隊の主力構成は、地元で徴募されたガリア・ゲルマニア系の兵士だったはずで、であれば、いわゆる親の七光りで、ほとんど単身での落下傘人事で方面軍司令官になったコンスタンティヌスにとり、兵士や住民の信頼を確保するため、当然色々と配慮せざるをえず、それは後世の 4 世紀末のある歴史家が彼の統治を総括して「最初の 10 年間はすばらしい君主だった、続く 12 年間は盗賊であり、最後の 10 年間はあまりの浪費で禁治産者だった」（無名氏『諸皇帝伝抜粹』*Epitome de Caesaribus*）と評していることに端的に示されているように、当初はいわば猫かぶりしていて、それが最初に変化するののは 312 年 10 月 28 日の戦闘で帝都ローマを拠点としていたマクセンティウスを倒して、新たにイタリア、北アフリカ、スペインの併合を達成し、要するに帝国西部の覇者となって以降とされている。

その指標としてあげられるが貨幣の裏側に打刻される神格の変化で、それまではマルス神が普通だったのが、突如、不敗太陽神 Sol. Invictus 一色となり、その状況は今度は逆に 320 年代にぴたりと太陽神が消え去るまで約 10 年間続くのである（但し、それは庶民が日常的に使用する青銅貨についてであり、記念品、贈答用に制作された金貨やメダイでは生き残ってゆく一実は彼の生涯を通じて継承されてゆくのだ――が、この問題には後日触れる予定）。

このような流れの中で、今回の発表は、コンスタンティヌス統治の最初の 10 年間について論じる。

^^^^^^^^^^^^^^^^

当日配布レジメ（修正済み）

## 1. 問題提起

従来の研究史では、コンスタンティヌスの初期信奉宗教はペルシア・オリエント起源の「不敗太陽神」Sol Invictus であり、後に彼は東方密儀宗教のキリスト教に改宗した、とみなす言説が主流となっている。だが私見では、彼の生涯の節目（272/3 生：306/7/25-西部副帝、310/5-西部正帝、312/10-西部単独皇帝、324/7-337/5 東西単独皇帝）に注目すれば、その初期統治の6年間（293 年以降の父帝時代を含めると実に 19 年間）において、彼の権力基盤は専らガリア・ゲルマニア・ブリタニアに限定されていたのであり、そこで徴用された麾下軍団兵の忠誠をいかに確保するかこそ彼の喫緊の課題であった。その彼にとりケルト・ゲルマン的の神格の取り込みは決して些細な事案ではなかったはずである。論より証拠、残存証言はそれを明確に示している。

## 2. 文書史料精査 a. 無名氏『ラテン頌詞集』VI(VII).21.3-7（310 年）

2. [コンスタンティヌス軍が南仏でのマクシミアヌスの反乱鎮圧のため国境戦線を暫時離れたとき、(国境守備隊所属のフランク人たちの) 蛮族がマクシミアヌス側に寝返ったが、コンスタンティヌス軍の迅速な帰還を知ると事態はたちまち沈静化した]。3. その知らせが届いた後のこと、そしてあなたが旅程を倍速 [おそらく 40km/日。通常行軍速度は 25km/日] の労でお企てになられると、すべての波浪は収まり、そしてあなたが後に残されたあらゆる所で平穏が回復されたのです。[幸運の女神] フォルトウナご自身がこのようにお定めになりましたので、あの時あなたが上首尾に事を収められたこと自体、全世界で最も美しい神殿に向かうため、あなたが道を逸れて ubi deflexisses、ご覧のようにまさに神の御前で誓ったことを不死の神々に伝えるように促しているのです。4. あなたはご覧になりました、私は信じます、おおコンスタンティヌス様、あなたのアポロ神が、[勝利の女神] ウィクトリアとともに、あなたに月桂樹の冠を各々差し出すのを。この冠のひとつひとつが 30 年を示す予兆でした [彼は当時 38 歳。65 歳で死亡]。これは実に人間の寿命です。あなたにかのピュリア人 [神から長寿を与えられたトロイヤ戦争での神話上の武将ネストルを指す] 以上の長寿が約束されているに違いありません。5. でもなぜ、私は「信じる」と言うのでしょうか。全世界の統治はアポロ神に負うと吟遊詩人たちの神曲は予言していましたが、その方をあなたご自身がご覧になり、彼の似姿をお認めになりました。6. 私はこのように起こったのだと今信じています。なぜなら、おお皇帝よ、あなたはあの方のように、若く、喜びに満ち、健康の招来者で、いとも端麗なお方だからです。7. まさしく、それゆえ、あなたはそれらの最も由緒あるお社に、もはやその古来からのもの [宝物] が無くなっているのにお気づきになり、多くの宝物で栄光を与えられたのです。今や、すべての神殿があなたをそれらへと招き寄せるがごとくに見えています。そして特別に我らがアポロ神は、その沸騰する湯で、特に

あなたがお嫌いになる偽証を罰することでしょう。

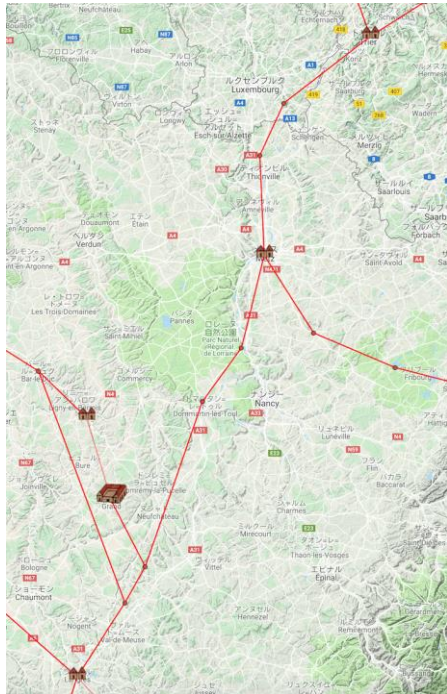
論点1：310年の翌年劈頭に新年を言祝い、トリーア宮廷において当代一流と目される修辞家が皇帝の面前で朗読したこの頌詞は、異教的背景をまったく隠そうともせず、皇帝の戦勝と幸先よい予言を高らかに唱っていて、一部の研究者によって早くから注目されてきた。にもかかわらず、その成果はなぜか広く衆知されずに今日に至った観がある。本発表の眼目は、再度関係諸史資料を精査し、旧説の妥当性を再評価することにある。



図1：帝国西部のケルト・ゲルマン系諸部族分布図（後述の「Leuci」族居住地は、Bergica と Germania に挟まれた凸の底辺部に見える；その上の「Treveri」族の主邑が後世のトリーア）

310年初夏、義父マクシミアヌスの陰謀が露見し、それを鎮圧すべく南仏に進軍したコンスタンティヌスは、迅速に義父を誅殺しての帰路、寄り道して訪れたという叙述から、すでに1926年にカミール・ジュリアンは、彼の訪問地としてロレーヌ地方の現 Grand (古名 Andesina, Grannum とも) に白羽の矢を立てた。そこはトリーアの手前 220km の現 Neufchâteau 付近で西に折れ、15km 行った先にあって、かねてより聖泉で著名な巡礼地だった。頌詞家は主神を「アポロ神」としているが、これはその地域に居住していたケルト・ガリア系の Leuci 族が、太陽神・治癒神・予言神として信奉していた地方神、Grannus 神のことであり、それがギリシア・ローマ神との機能的対応関係によって Apollo(n)神に同

定され、Apollo Grannus (ないし A.Belenus) 神と呼ばれるようになっていたからである。この地方神は、Apollo Grannus 神=Sol Invictus 神=Mithras 神との習合で、一般兵士たちにとっても信仰対象となりえる神格であり、帝国宗教レベルにおいても皇帝保護神格に容易に変身可能な存在であった。



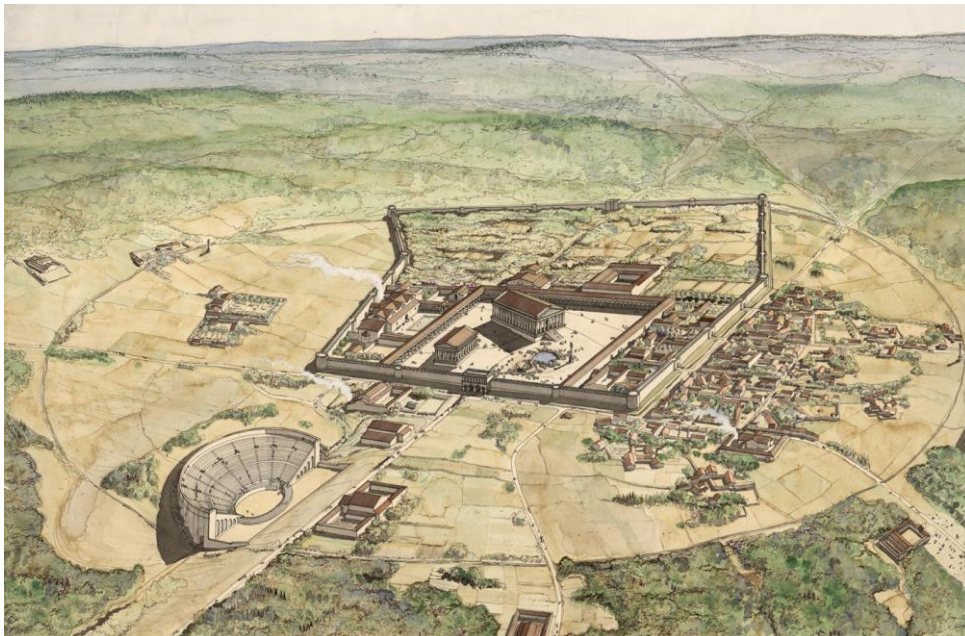
補遺図版1 : ラングル・トリーア間の地図(Google Earth)と、*Tabula Peutingeriana* 上での表記(Andesina)。トリーア (Augusta Treverorum)、トゥッルム (Tullum/Tullo) 等に比べて隆盛のほどが分かる

その聖所は、考古学的にすでに前2世紀末か前1世紀初頭にその存在が確認されている。直径 800~900m の特異な円形集落で、その中央に聖泉と神域・神殿があった(現在そこは当然のように古ぼけたキリスト教教会が陣取っている)。また 1 万 7 千の収容員数を誇る円形闘技場や、豪華な床モザイクのバシリカ址などの注目すべき遺跡がころうじて残っていて、現況の、人影もなく眠ったような閑散とした農村集落からは想像しがたい往時の繁栄振りを偲ばせている。そこに、地元周辺の地域住民のみならず地中海世界各地から巡礼が訪れていたことは、以下の文書史料や考古学的出土資料で立証されている。



Fig. 6. Plan de Grand avec les structures antiques connues. En bleu : puits, citernes et accès aux galeries souterraines (Conseil général des Vosges, dessin Th. Dechezleprêtre).

図 2 : Grand 平面図



補遺図版 2 : 当時の Grannum 想像図

Dion Cassios (77[78].15.5-6) は、以下のように述べている。心身の治癒を求めていたカラカラ帝 (在位 : 211-217 年) は、治癒神をもとめて、グラノスのアポロン神、(ペルガモン) アスクレピオス神、(アレクサンドリアの) セラピス神を巡礼して回ったが、どの神も皇帝を助け

ることはできなかった、と（皇帝の Grannus 参内記録が残っているのは、この彼とコンスタンティヌス帝のみ）。

ουτε γάρ ὁ Ἀπόλλων ὁ Γράννος ουθ' ὁ Ἀσκληπιός ουθ' ὁ Σάραπις καίπερ πολλά ἴκετεύσαντι αὐτῷ, πολλά δέ προσκατερήσαντι ὠφέλησεν. ἐπεμψε γάρ αὐτοῖς καὶ ἀποδημῶν καὶ εὐχάς καὶ θυσίας καὶ ἀναθήματα καὶ πολλοὶ καθ' ἑκάστην οἱ τοιοῦτό τι φέροντες διέθεον ἤλθεδέ καὶ αὐτός ὡς καὶ τῇ παρουσιῳι τι ἰσχύσων καὶ ἐπραξε πάνθ' ὅσα οἱ θρησκευόντες τι ποιοῦσιν, ἐτυχε δ' οὐδενός των ἐς ὑγίειαν τεινόντων.

とはいえ、1822年にJ.-B.P.Jolloisが「ユグ庭園」jardin Huguetの、神殿とポルティコの間で迫持石を発見していたが、1982年までにそれを補完する諸断片も出てきて、「皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスへ」(AD IMP・M [・AVRELIVM・A] NTONINVM)の刻文が確認されたことにより(これがカラカラ帝の公式姓名だった)、この碑文によってグラヌムが3世紀初頭に皇帝カラカラから実際に恩恵を受けていたことが確認された。

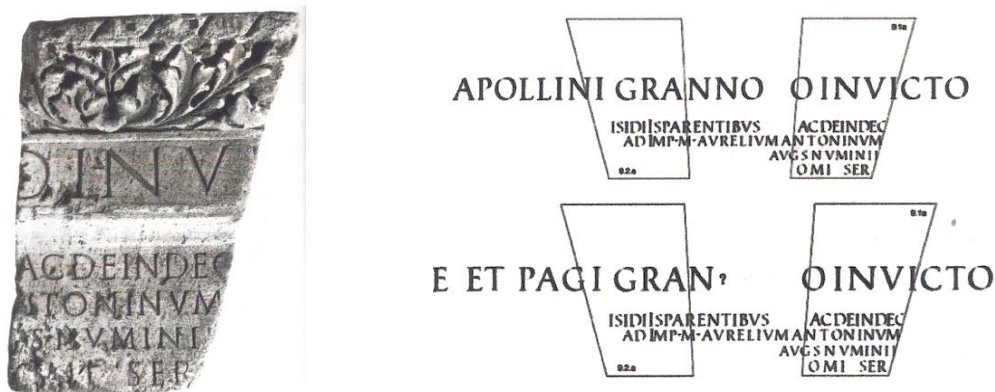
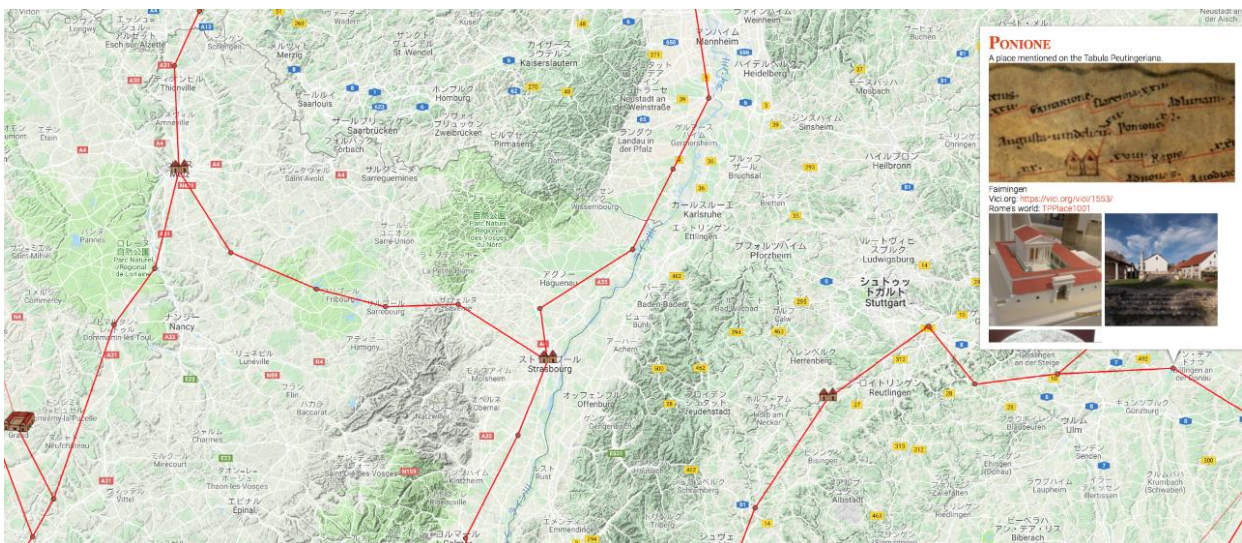


図3：発見碑文と、復元例2例



補遺図版3：カラカラ帝の寄進が確認されているもう一つの Apollo Grannus の聖所 Falmingen

また、小アジアのエフェソスで 1905 年発見の碑文によれば、興味深いことに、一人の弁護士 *advocatus* がおそらくご当地のアルテミス女神がらみの使節として、カラカラ帝と時代的に重なる 209-217 年に、帝国各地（ブリタニア、ゲルマニア、シルミウム、ニコメディア、アンティオキア、メソポタミア）に派遣されていて、213 年にはアポロ・グラヌス神の聖地を訪れていたことが明記されている。これにより当時グラヌス神の名声が帝国東部にも聞こえていたことが確認されよう。

10	σαντα καί συνδικήσαντα ἐπί θεοῦς [Σε-] ουήρον καί Ἀντωνῖνον εἰς τε τήν βασιλ[ίδα] 'Ρώμην πλεονάκις καί εἰς Βρεταννίαν_κα[ί Γερ-] μανίαν_τήν ἄνω καί γενόμενον_καί μέχ[ρι] τοῦ Γρανίου 'Απόλλωνος διά τήν_πατρ[ίδα]	209-211  213
15	[κα]ί ἐν Σιρμῖω καί ἐν Νεικομηδεῖα [κα]ί ἐν 'Αντιόχεια, γενόμενον δ[έ] καί μέχρις Μεσοποταμίας πλεον[ά-] κις διά συνδικίας	214. 214/15 215-216 216-217

さらに時代を 2 世紀下って 425 年頃、キリスト教詩人 *Claudius Marius Victor* (*Alethia*, III.204ff.) は、デルフォイのアポロン神の艱難について「(アポロン神は) 住まいを変えることを余儀なくされ、レウキ人たちの医者にならしめられた」と語っていた。ギリシア神話においてゼウス神の息子アポロン神は、芸術以外にも多岐に亘る属性を有していたが、今の場合、病を癒す治療神と太陽神に同一視されていたことに言及すれば足りるだろう（治癒神として著名なアスクレピオス神はアポロン神の息子だった）。アポロン神の座所の移動言説は、5 世紀におけるキリスト教の勢力拡大がデルフォイを圧迫したことの反映だったとっていい。

… Ventos terra spirante loquaces

205 lusit et ante Themis, populis post falsus Apollo

imposuit sedesque dehinc mutare coactus

Leucorum factus medicus nunc Gallica rura

transmittens profugus Germanas fraude nocenti

sollicitat gentes et barbara <pectora> fallit.

さて話をもとに戻そう。テトラルキアの諸皇帝のうち、東部皇帝たちはヨウイウス (=ユピテル)、西部皇帝たちはヘルクレスを保護神格として掲げ、帝国統治の政治神学的な正統性の根拠としていたが、コンスタンティヌスは、310 年の重大転機（それまで彼の帝位の正統

性の後ろ盾だったヘルクレス・マクシミアヌスの死去) に直面し、新たにアポロ神 (=アスクレピオス神=Sol Invictus 神=Mithras 神) を自らの守護神格に採用する決断を下した。これはテトラルキア体制からの訣別を意味する重大な方針転換で、310年の頌詞はその高らかな宣言でもあった(その後のコンスタンティヌスのキリスト教への急接近は、主として貨幣資料を根拠に主張されてきた。本発表で触れる余裕がないが、発表者はこれも再検討が必要と考えている)。しかしそれは、これまで欧米研究者たち (=我が国の研究者たち) によって想定されてきたような、帝国東部の神々ではなく、ガリア・ゲルマニア出身の方面軍兵士たちに身近なケルトの神々だったはずである。そうでなければ彼は生き残れなかったからだ。

アポロ・グラヌス神は、太陽神的属性を別にすると、癒しと予言能力に長けていて、聖なる泉、ないしは偽証者を茹で殺すほどの熱湯温泉と結びつけられていた。その流布地域は、ブルゴーニュから西オーストリアにかけてで、モーゼル川と上ライン溪谷に集中している。地域によって女神 **Sirona** ないし **Thirona** とペアにされ、彼女は女神ディアナ(奇しくもアポロ神の同伴者) と同一視され、女神の持物は卵と蛇だった。



図4：女神 Sirona と Grannus 神小像



図5：女神 Sirona 遺物分布図

なお、本発表では簡単に触れるだけに留めざるをえないが、ケルト系の天空・雷・太陽神としては **Taranis** 神のほうがより著名で、テウタテス神・エスス神と共に三対神を構成していた (Lucanus, *Pharsalia*, I.444-6)。その特徴的持物が車輪で、約 200 近くの事例が確認されている。この車輪がくせ者で、コンスタンティヌスが採用した所謂「ラバルム」**Labarum** 軍旗に似てなくもない。というよりそっくりである。



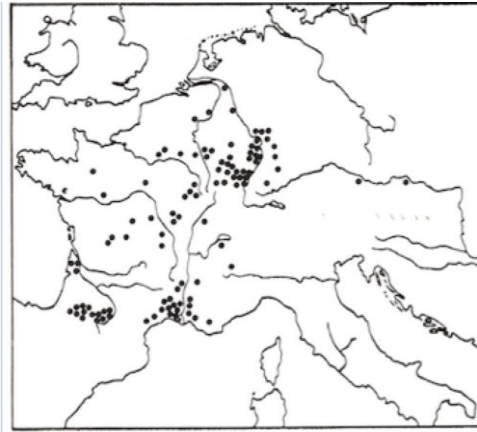


図6：天空雷神と車輪の分布



図7：車輪帯同の小神像 Le Châtelet Landouzy-la-

Ville

そして、ここにも当然ギリシア・ローマとの習合が忍び寄る。それはもちろん、征服者ローマ人に自らを重ねることを厭わない上流社会層の生き様であった。もちろんそうは考えなかった人々、そんなことを考える余裕もなかった人々が大半を占めていたのであろうが。



図8：Labarum の一例



図9：ローマ化の事例 Séguret

Alzey

考古学的遺物として、最後に若干横道に逸れるが、グランから1822年にいわゆる「ユピテル神の円柱」(Les Colonnes à Jupiter ; Jupitersäule)が発見されていることに触れておこう(さらに1861年に二体目も)。これは円柱上に騎馬のユピテル神が蹄で冥界の魔物を足蹴にしている特異な彫像で、東フランスとドイツで2世紀半ばから1世紀の間、盛んに建てられた。その祖型はMogontiacum(現マインツ)の上流市民が後60年に皇帝ネロ(在位:後54-68年)に献じた円柱で、それは帝都ローマのユピテル円柱のコピーだったらしい。当然、ローマ的意匠へのすり寄りが著しく、それは2段で構成された台座部分に彫られた4神(Juno, Minerva, Mercurius, Hercules)・曜日神(Saturnus, Sol, Luna, Mars, Mercurius, Iupiter, Venus等)に顕著である。とはいえ、柱頭上を飾っているのは相も変わらずケルト・ゲル

マン（さらに言えばドルイド）的な、天空雷神だった。グランのアポロ神聖域からのユピテル神円柱出土は、どう考えるべきなのだろうか。

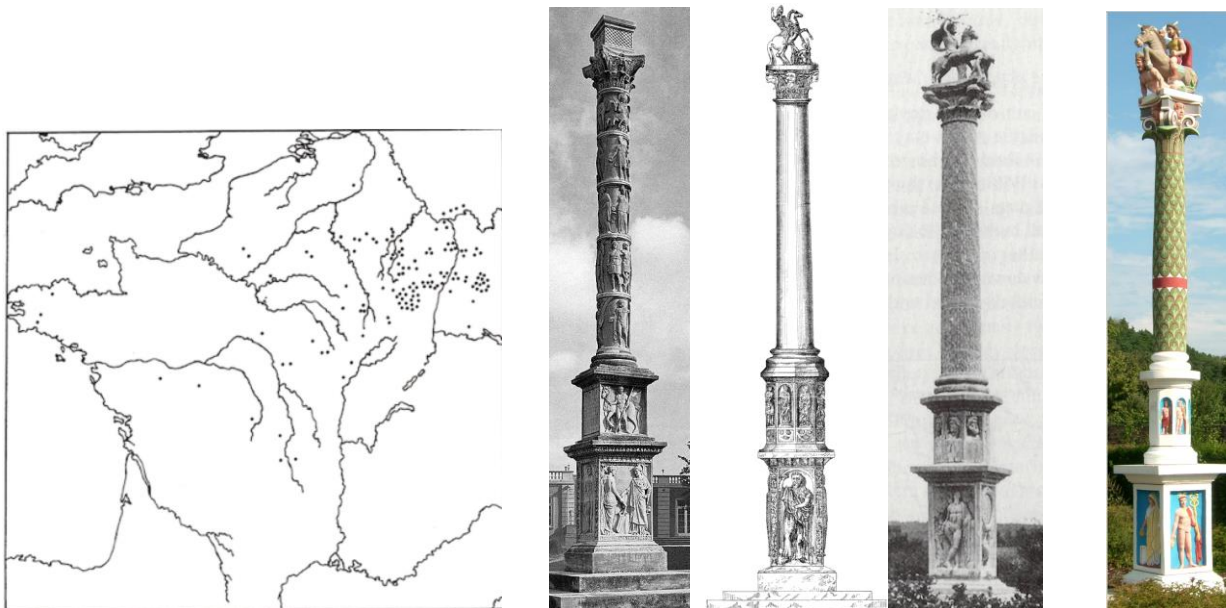


図 10：ユピテル神円柱分布図と復元例  
Schwarzenacker

Mainz Grand Hausen-an-Zaber



4. Luna, 3. Sol, 2. Saturn.  
2. Saturn, 1. Viktoria, 8. Venus.  
8. Venus, 7. Jupiter, 6. Merkur.

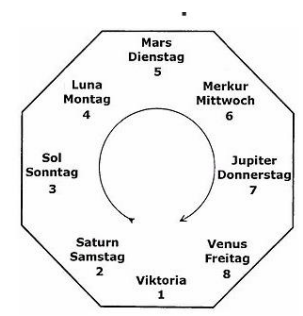


図 11： 曜日神レリーフの 1 例（復元）

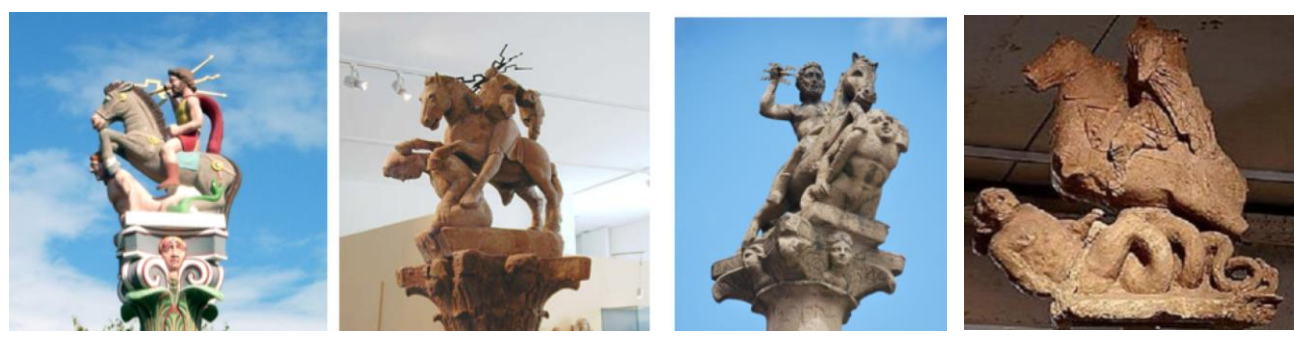


図 12： 騎馬雷神像復元部分図（中には、右端の蛇足神 Anguipede を蹴散らしているものもある）



図 13:Grand 出土のユピテル円柱上神像部分復元像

右は 1861 年発見の蹄で蹂躪されている Anguipede

以下二つの史料はキリスト教側のものである（今回の発表ではほとんど触れる余裕はなかったが）。

### 3. 史料精査 b. ラクタンティウス『迫害者（皇帝）たちの死』 44.4-5 (315 年頃)

[3. それまではマクセンティウス軍の方が優勢だったが、コンスタンティヌスは最終局面で気力を奮い立たせ、全軍をローマ市近くに移動させムルウィウス橋地区に陣取った。]

4. マクセンティウスが帝権を得たその日の記念日、10 月 27 日 [ママ：本当は 28 日] が近づき、帝位就任五年祭 [ママ：六年祭] が終わりになろうとしていた。5. コンスタンティヌスは夢の中で神の天上のしるしを自分の兵士たちの楯に記して戦闘に参加させるようにというお告げを受けた。彼は命じられた通りにした。そして文字 X を斜めにして、その先端を曲げて丸くし [†]、彼はキリストを楯に記した。

### 4. 史料精査 c. エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』(337 年末-340 年まで)

I.27. [コンスタンティヌスはマクセンティウスに対抗するには、強い助け手が必要であることを知り、自分の父の神にのみ敬意を払うべきだと考えた]。

28.1. …彼がこれらのことを祈り真摯に嘆願すると、まったく意想外なある神的しるしが現れたのです。もし誰か他の人が語ったのであれば、それは、多分、受け入れ難いものとなったでしょう。しかし、その出来事があった後で相当な期間が経ってから、わたしがかたじけなくも接見と知遇の栄を得たとき、勝利者となられた皇帝がこの話を、直接わたしに語り、しかも、その言葉の真実性を誓いで保証されたのですから、いったい誰がその話を信じることを躊躇するのでしょうか。とくにその後の年月が彼の言葉が真実である証拠を供したのですから。

2. 真昼の太陽の頃で、一日がすでに午後になりはじめていた頃、コンスタンティヌスによれば、彼はまさしく己の目で、ほかならぬ天に、太陽の上に懸かる、その形状が光で示された十字架のトロパイオンを目にされたのです。それには「これにて勝利せよ」と書かれておりました。彼と兵士全員がその光景を見て驚愕しました。兵士はそのとき、彼がある場所に率いて行く遠征に同道していて、その奇蹟を目にしたのです。

29. そしてコンスタンティヌスによれば、彼はその幻が何であるのかが分からず、すっかり当惑されたそうです。彼が夢中になってあれこれ思案しつづけていると、いつしか夜になっておりました。そして睡眠中の彼に、神のキリストが、天空に現れたしるしと一緒に現われ、彼に天空に現れたしるしの写しをつくり、これを敵の攻撃から身を守る護符として使用するよう勧められたのです。

30. 朝になると、コンスタンティヌスはすぐに起き上がり、この不思議な出来事を友人たちに語りました。ついで金細工職人や宝石職人を集めると、彼らの間に腰をおろしてそのしるしの形状を説明し、金や宝石を使ってそれを模した物をつくるよう命じられたのです。

以上は、神がこれを嘉されたので、皇帝ご自身がわたしたちにもその目で見て受け入れるようにされたものです。

31.1. それは次のような形状につくられておりました。金箔で覆われた長い縦棒に横棒が取り付けられ、十字架状になっておりました。縦棒の突端には宝石や金が埋め込まれた花冠がしっかりと取り付けられておりました。そこには救い主の呼称の象徴が、最初の文字を介してキリストの名を暗示する二つの要素で示されておりました。ロー (P) がちょうど真ん中でキー (X) と交差していたからです。… [P]

3. 皇帝はつねにこの救いのしるしを、全敵対勢力にたいする護符として用いられました。彼は、[十字架を] 模した物を全軍の先頭に立たせるのだ、と命じられました。

32.1. とはいえ、これらは少しばかり後になってからなされたのです。幻が現れた時のことですが、コンスタンティヌスは、この尋常ではない幻に仰天し、ご自分に現れた神以外の他の神を拝さないと決めると、ご自分の問いかけに答えてくれる者を召集されました。彼は彼らに、この神が何であるか、幻の中で現れたしるしをどう説明するのか、と尋ねられたのです。2. 彼らは、その神は一にして唯一の神の、唯一人生まれた子であり、皇帝に現れた印は不死の象徴であり、かつて地上に来られたときに獲得した死に打ち勝った勝利のトロパイオンだった、と述べました。…

(『教会史』にこのエピソードが登場していないことから、『生涯』での記述内容が『教会史』最終改訂作業後の「相当な期間が経ってから」得た情報であることが分かる)

論点2：両史料は皇帝が幻視を見たという点でのみ合致している。また、大半の欧米 (=我が国) 研究者の不正確なエウセビオス理解は是正さるべきで、その原因の大半は、誤りが散見されるラクタンティウス叙述との安易な接合のせいである。また、皇帝の保護神格問題

も、キリスト教側プロパガンダに安直に沿って理解される傾向にある。それは、現在も侮りがたい影響力を有しているキリスト教会を慮ってのことだが、歴史研究に置いてそのような配慮は当然捨て去るべきと発表者は考える。

【小括】異教とキリスト教両史料の情報源はおそらく同一事象で、立場の違いで解釈が異なっているだけのことと考えたい。所謂ラバルム問題は別の機会に改めて検討する予定である（生きて入れ歯の話だが）。ここでは、アポロ神の隠れた効用を指摘する文献番号 52)のジャンタル・ベルトーの卓抜な見解を紹介しておこう。「クラウディウス帝（帝位：後 41-54 年）の迫害後、ドルイド僧はアポロ神の聖地を格好の隠れ家として避難した。彼らは 3 世紀になると公然と姿を見せ始めるが、こうしてアポロ神はケルトの伝統とドルイド教の存続に一役買っただけでなく、宗教という傘の下で医療の普及に手を貸してもいた」。それは帝国主義的ローマ化政策にさらされる中で、ケルト宗教がローマ化を装いつつその実やり過ぎして生き残りを策した苦肉の、あるいは老獪な生き様に他ならない。だからこそ、地域庶民・兵士の篤い支持も勝ち得ることができたのである。コンスタンティヌスをめぐる諸論点も、こういった視点で見直すことで、豊かな成果の獲得が約束され、前人未踏の新視界を切り開けるはずである。

若い世代の研究参加を心から求める次第である。

## 文献一覧

### 【史料】

- 01) Hrsg. von Eduard Schwartz u. Theodor Mommsen, Zweite, unveränderte Auflage von Friedhelm Winkelmann, *Kirchengeschichte*, in: *GCS, Eusebius Werke*, II/2, Akademie-Verlag, 1907/1999（秦剛平訳, エウセビオス『教会史』2 巻, 講談社学術文庫, 2010（初訳, 3 巻, 山本書店, 1986-88））。
- 02) von Friedhelm Winkelmann, *Über des Kaisers Konstantin*, in: *GCS, Eusebius Werke*, I/1, Akademie-Verlag, 1975（秦剛平訳, エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』西洋古典叢書, 京都大学学術出版会, 2004）。
- 03) Introduction, texte critique et traduction de J. Moreau, *Lactance. De La mort des Persécuteurs*, 2 toms., in: *Sources Chrétiennes* 39, Paris, 1954/2006 ; Edited and translated by J.L. Creed, *Lactantius de Mortibus Persecutorum*, Oxford, 1984.
- 04) Introduction, Translation, and Historical Commentary by C.E.V. Nixon, Barbara Saylor Rodgers with the Latin Text of R.A.B. Mynors, *In Praise of Later Roman Emperors. The Panegyrici Latini*, U. of California Press, 1994.

### 【文献】

- 05) J. ブルクハルト（新井靖一訳）『コンスタンティヌス大帝の時代：衰微する古典世界からキリスト教中世へ』筑摩書房, 2003（Jacob Burckhardt, *Die Zeit Constantins des Grossen*, 1853）。

- 06) A.H.M.ジョーンズ (戸田聡訳) 『ヨーロッパの改宗：コンスタンティヌス《大帝》の生涯』 教文館, 2008 (A.H.M.Jones, *Constantine and the Conversion of Europe*, London, 1948 : Univ. of Toronto Press, 1962) .
- 07) 弓削達「エウセビオスとの関係より見たるコンスタンチン問題の若干側面」『青山経済論集』 3-2, 1952, 21-71.
- 08) 「コンスタンティヌス大帝とキリスト教の問題：『ウィタ』と貨幣を中心に」増田四郎編『現代歴史学の新動向』 如水書房, 1953, 55-92.
- 09) 「[学界動向] コンスタンティヌス大帝と太陽宗教の問題：F.Altheim, *Aus Spätantike u.Christentum*, 1951を繞って」『史學雑誌』 63-2, 1954, 58-72.
- 10) 「コンスタンティヌスの『改宗』とドナティズム紛争」神戸大学文学会『研究』 8, 1955, 1-57.
- 11) 「《學界展望》コンスタンティヌス論争の進展」『一橋論叢』 41-5, 1959, 41-57 ; 42-2, 1959, 58-74.
- 12) 「[学界動向] *Vita Constantini*研究の進展」『史學雑誌』 70-3, 1960, 47-57.
- 13) 新田一郎「コンスタンティヌスの改宗：その時期と動機をめぐる問題」『西洋史学』 53, 1962, 15-31.
- 14) 「コンスタンティヌスと太陽宗教：Constantin-Helios問題」『史林』 46-1, 1963, 106-124.
- 15) 「コンスタンティヌスとキリスト教：対マクセンティウス戦を中心に」『史窓』 63, 2006, 25-38.
- 16) 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』 下, リトン, 2003 :
- 17) 小堀響子「古代ローマの太陽神：帝政期前半の中心に」, 151-167.
- 18) 中西恭子「帝政後期ローマの皇帝たちと太陽神：ソル・インウィクトゥス信仰を中心に」, 170-182.
- 19) 秦剛平「3 コンスタンティヌスの幻視と聖十字架伝説」『描かれなかった十字架：初期キリスト教の光と闇』 青土社, 2005, 79-115.
- 20) 保坂高殿「古代キリスト教における十字形磔刑図像の成立」『聖書学論集』 41, 2009, 551-6.
- 21) 「エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』の諸問題：その真偽性, 成立年代, 編集意図」『西洋古典学研究』 58, 2010, 60-73.
- 22) 「コンスタンティヌス大帝の“改宗”年代」『*Studia Classica*』 1, 2010, 1-54.
- 23) 「ローマ中央広場のコンスタンティヌス像とその碑銘」『*Studia Classica*』 1, 2010, 175-204.
- 24) 「312年天空十字顕現の文学的虚構性とその伝承成立年代：『コンスタンティヌスの生涯』偽書説への一論拠」『*Studia Classica*』 2, 2011, 127-160.
- 25) 「エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』とテオドシウス朝期の文学的プロパガンダ」『キリスト教史学』 66, 2012, 61-79.
- 26) P. ヴェーヌ (西永良成・渡名喜庸哲訳) 『「私たちの世界」がキリスト教になったとき：コンスタンティヌスという男』 岩波書店, 2010 (Paul Veyne, *Quand Notre Monde Est Devenu Chrétien (312-394)*, Paris, 2007) .
- 27) ベルトラン・ランソン (大清水裕訳) 『コンスタンティヌス：その生涯と治世』 文庫クセジュ1967, 白水社, 2012 (Bertrand Lançon, *Constantin (306-337)*, Coll. «*Que se-is-je?*» n°3443, Paris, 1998).
- 28) 豊田「記念建造物の読み方：コンスタンティヌス帝の二大建造物をめぐって」豊田編『モノとヒトの新史料学：古代地中海世界と前近代メディア』 勉誠出版, 2016, 72-92.

- 29) 「三一二年のコンスタンティヌス軍」『軍事史学』54-2, 2018, 99-118.
- 30) R. L. ウィルケン (大谷哲他訳) 『キリスト教一千年史：地域とテーマで読む』上, 白水社, 2016 (Robert L. Wilken, *The First Thousand Years. A Global History of Christianity*, Yale UP., 2012) .
- 31) Eugène Hucher, *L'Art Gaulois ou les Gaulois d'après leurs Médailles*, Paris, 1868.
- 32) Heinrich Schrörs, *Konstantins des Großen Kreuzerscheinung. Eine kritische Untersuchung*, Bonn, 1913.
- 33) Camille Jullian, *Histoire de la Gaule*, t.7, Paris, 1926, 106, n.7.
- 34) Émile Espérandieu, *Recueil Général des Bas-Reliefs, Statues et Bustes de la Germanie Romaine*, Paris & Brussels, 1931.
- 35) Henri Rolland, Note sur deux stèles découvertes à Glanum (Saint-Rémy de Provence), *Bulletin de la Société préhistorique de France*, 32-12, 1935, 640-649.
- 36) W. Seston, La vision païenne de 310 et les origines du chrisme constantinien, *Annuaire de l'Institut de philologie et d'histoire orientales et slaves de l'Univ. Libre de Bruxelles*, 1936, 373-395.
- 37) Pierre Lambrechts, Contributions à l'Étude des Divinités Celtiques, *Rijksuniversiteit te Gent. Werken Uitgegeven door de Faculteit van de Wijsbegeerte en Litteren*, 93, 1942.
- 38) Édouard Galletier, La mort de Maximien, d'après le panégyrique de 310 et la vision de Constantin au temple d'Apollon, *Revue des Études Anciennes*, 52, 1950, 288-299.
- 39) Jean-Jacques Hatt, La vision de Constantin au sanctuaire de Grand et l'origine celtique du labarum, *Latomus*, 9, 1950, 427-436 et 1pl.
- 40) Communication: La vision de Constantin au sanctuaire de Grand et l'origine celtique du labarum par M. Jean-Jacques Hatt, *Compte rendus de séances de l'Académie de Inscriptions et Belles-Lettres*, vol.94 -1, 1950, 83-86.
- 41) Josef Keil, Ein ephesischer Anwalt des 3. Jahrhunderts durchreist das Imperium Romanum, *Bayerische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse Sitzungsberichte*, Jahrgang 1956, Heft 3.
- 42) Charles Picard, D'Éphèse à la Gaule, et de Stobi (Macédoine) à Claros, *Revue des Études Grecques*, 70, 1957, 108-117.
- 43) Pierre Boyancé, L'Apollon solaire, *Melange d'archéologie, d'épigraphie et d'histoire. offerts à Jerome Carcopino*, 1966, 149-170.
- 44) Roger Billoret, *Grand la Gallo-Romaine*, Nancy, 1972.
- 45) Roger Billoret, Découvertes récentes à Grand, *Archéologia*, 71, 1974, 22-28.
- 46) Gerhard Bauchhenss u. Peter Noelke, *Die Jupitersäulen in der germanische Provinzen*, *Beihefte der Bonner Jahrbücher*, 41, 1981.
- 47) Sous la direction d'Yves Burnand, *Études d'Architecture Gallo-Romaine, Études Lorraines d'Archéologie Nationale*, 1, Presses Universitaires de Nancy, 1983.

- 48) Miranda Green, *The Wheel as a Cult-Symbol in the Romano-Celtic World. with Special Reference to Gaul and Britain*, *Collection Latomus*, 183, 1984.
- 49) Miranda Green, Jupiter, Taranis and the Solar Wheel, Ed. by Martin Heinz & Anthony King, *Pagan Gods and Shrines of the Roman Empire*, *Oxford Univ. Committee for Archaeology, Monograph*, No.8, 1986, 65-75.
- 50) Miranda Green, *Symbol & Image in Celtic Religious Art*, London & New York, 1989.
- 51) Paul Marie Duval, Un texte du V<sup>e</sup> siècle relatif au sanctuaire apollinien des *Leuci* (Meurthe-et-Moselle, Meuse, Vosges), *Publications de École Française de Rome*, 116, 1989, 427-432.
- 52) Chantal Bertaux, Caracalla et Constantin a Grand, *Les Dossiers d'Archéologie*, N.162, 1991, 50-53.
- 53) Martin Waliraff, Constantine's Devotion to the Sun after 324, *Studia Patristica*, 34, 2001, 256-269.
- 54) Greg Woolf, Seeing Apollo in Roman Gaul and Germany, Ed. by Sarah Scott & Jane Webster, *Roman Imperialism and Provincial Art*, Cambridge UP., 2003, 139-152.
- 55) Jean Loicq, Vie religieuse en Gaule. Héritage celtique et courants méditerranéens, *Folia Electronica Classica*, 11, 2006.
- 56) Th.Klaus u. M.Girarder, *Der Kaiser und Sein Gott. Das Christentum im Denken und in der Religionspolitik Konstantins des Großen*, Berlin, 2010.
- 57) Jonathan Bardill, *Constantine, Divine Emperor of the Christian Golden Age*, Cambridge UP., 2012, 84 -125.
- 58) Andreas Hofeneder, Apollon Grannos. Überlegungen zu Cassius Dio 77,15,5-7, eds. Andreas Hofeneder & Patrizia De Bernardo Stempel, *Théonymie celtique, cultes, interpretatio : X. Workshop F.E.R.C.A.N., Paris 24.-26.Mai 2010, Mitteilungen der Prähistorischen Kommission*, 79, Vienna, 2013.
- 59) Johannes Wienand, Costantino e il *Sol Invictus*, *Enciclopedia Costantiniana*, I, Roma, 2013, 177-195.
- 60) Pascal Vipard, L'Apport de l'épigraphie à la connaissance du «sanctuaire» de Grand, éd Th.Dechezie-prêtre, K.Gruel et M.Joly, *Agglomérations et sanctuaires, Réflexions à partir de l'exemple de Grand, actes du colloque tenu à Domrémy-la-Pucelle, 20-23 octobre 2011*, coll. *Grand, Archéologie & Territoire*, 2, 2015, 147-165.

## 【付録】

2018/10/28 広島史学研究会大会西洋史部門発表概要

### コンスタンティヌス帝の保護神性再考

豊田浩志（上智大学）

我が国では、未だにコンスタンティヌスが最初のキリスト教皇帝であるという俗説が、



教科書レベルのみならず研究者にさえ支持されているようである。しかしそれは、キリスト教側の執拗なプロパガンダで後付け的に醸成された幻想に過ぎない。我が国の歴史学界はいつまでこのぬるま湯で揺蕩っているつもりなのであろうか。

本発表では、西欧においてすでに 20 世紀初頭から疑問視されてきたコンスタンティヌスの帰属宗教を再考する。発表者はこれまで主としてキリスト教側史料の批判的吟味でこの問題を追及してきたが、今回注目するのは、当時、宮廷修辞学者が皇帝の面前で公式披露した頌詞 *Panegyrici Latini* である。それらは、皇帝コンスタンティヌスが支配領域ガリアで直面していた諸課題を色濃く反映していた。考古学的知見を加味してのそれらの詳細な再検討は、キリスト教プロパガンダの虚構を余すところなく露呈させるであろう。